

横穴式石室

解説書

この度は尾崎喜左雄博士にご来場いただき、誠にありがとうございます。本解説書をよく読み、古墳への理解にご利用ください。

▲ 学習上の注意

- ・古墳は歴史的にとっても価値のあるものです。資料も含め大切に扱きましょう。
- ・横穴式石室を含め群馬県古墳調査に貢献された尾崎喜左雄博士に敬意を持ちましょう。

石室説明

群馬県では古墳時代の後期になって導入された埋葬施設。古事記や日本書記に描写される死後の世界は、横穴式石室の内部の光景から着想されたものとする説がある。

縦穴式石室との違い

	横穴式石室	縦穴式石室
時期	古墳時代後期～終末期	古墳時代初期～中期
埋葬人数	1人～十数人	1人
特徴	墳丘には中に入る道(羨道)があり、その奥に遺体を納める空間(玄室)が広がっている。かなり広い。追葬できる。時代的に埴輪等の副葬品が発掘されることが多い。	墳丘の頂点から真下に縦穴を掘り、石室をつくり遺体を納める。蓋石をのせた上に土をかぶせるので二度と蓋を開けることができない。単独葬。
図		
尾崎研の発掘例と年	壇塚古墳 (前橋,S25)、高塚古墳 (榛東,S34,35) 八幡観音塚古墳 (高崎S24,35) ←東日本最大の石室	鶴山古墳 (太田,S23) 蕨手塚古墳 (伊勢崎,S27)

使用材料

安山岩—赤城、榛名の周辺や山岳地帯の石室に多く使用されている。巨石を得ることができるため、奥壁、側壁、側壁の根石、天井石等に利用されている。削石(けずりいし)としても利用しやすい。

凝灰岩—新田郡の北部、甘楽郡の北辺に産する。加工が容易であるため精巧なものが多い。石棺によく使用される。石室には高崎市などの一部地域でしか使われていない。

砂岩—多野郡の山地の裾野に産する凝灰質砂岩(天引岩)が有名である。凝灰岩よりは固いが比較的軟質であるため巨石を割ることができ、周辺地域では石室の奥石及び天井石に利用されている。一般的のものは加工が困難であるため自然石積みに使用され、ほとんど転石のまま利用される。

*ほかに、けいせき へんがん ねんぼんがん
*ほかに、珪石や片岩、粘板岩などが利用されている。

バリエーション

- 石室の型
- 袖無型(そでなしがた) —羨道*と玄室**の区別がつけがたいもの
 - 片袖型(かたそでがた) —羨道から玄室に移る部分の左右壁のいずれか一方が著しく屈曲し、両者の区別の明瞭なもの。
 - 両袖型(りょうそでがた) —羨道から玄室に移る部分の左右壁共に著しく屈曲し、両者の区別の明瞭なもの。

- 構成について
- 単室(たんしつ) —羨道を除いた部分が単室で成っているもの
 - 複室(ふくしつ) —羨道を除いたものが二室以上で成っているもの

- 形について
- 正方形—正方形一個で構成されていて、単一化されたものようである。
 - 短形—長辺が短辺の整数倍のものなど様々な比のものがある。
 - 胴張型(どうばりがた) —短形の長辺を弧状に外側へ張り出して構成したもので、複雑である。
 - 撥型(ばちがた) —胴張形の反対で内側に弧をなしている。

- 石の積み方
- 切石積み—加工した石を積み上げる
 - 乱石積み—大小さまざまな石をうまく積み上げる
 - 割石積み—思う形に割った石を積み上げる

*羨道—外に通じる通路 **玄室—死者を納める部屋

よくある質問



Q

どうして縦穴式石室から横穴式石室になったのでしょうか？

A

横穴系の埋葬施設は中国で後漢の時代に成立しました。日本に入ってきたのは4世紀の終わりがごろから5世紀の初めにかけてですが、すぐにはあまり広まりませんでした。6世紀ごろに大和政権のおひざもとである近畿地方で大型前方後円墳に採用されたことをきっかけに、地域内の中小の古墳、全国に広がり完全に縦穴系の埋葬施設に変わりました。

Q

かつて一人だけ埋葬されていたのが、十数人以上が一つの古墳に埋葬されるようになったのはなぜですか？

A

横穴式石室になった当初は一つの石室に一体で埋葬していました。しかし、ほかの石室に追葬する際それ以前に埋葬された人の状態を目の当たりにし、蘇生の希望がたれたことで、同時期に伝来した仏教の霊肉分離の思想を受容するようになりました。その結果、以前と比べて埋葬することに対する価値観が変化し、少し雑になったのだと尾崎先生が著書で述べています。「上野国の古墳と文化」という本です。興味があったら是非読んでみてください。